

るに値する」と述べて第一次国共合作に於ける中共の背信行為に言及し、共産党と国共合作への強い疑念を表明すると共に「安内」は「攘外」に先行すると論じた。

中共蘇生し、北支緊迫す

にも拘らず、この年一月に内戦即ち掃共戦は停止され、「あと五分間」の命から中共は蘇生した。即ち一月六日、西安の西北剿匪總司令部が廃止され、これによつて、十年間に及ぶ国共内戦が事実上停止されたのである。

親日派の外交部長・張群は罷免され、反日・欧米派の王寵惠が就任した。その結果、張群の「一面抵抗・一面交渉」の外交路線は、欧米寄りに大きく方向転換することになった。

前述の如く、抗日路線は必ずしも一本化されたわけではなかったが、抗日戦準備は経済事情の一時的好転も手伝つて、積極的に推進された。一九三七年（昭和十二年）度の国民政府の軍事費は国家予算の七〇パーセントに上り、この巨額の軍事費を背景に陸軍百七十万人が整理され、百万を越える国民の軍事訓練が開始された。ソ連と中共の術策にのせられた中国は、俄然、軍国主義と戦争への道を狂奔し始めたのである。

北支は緊迫した。ここには宋哲元の第二十九軍十万、東北軍十一万など四十万の中国軍が五千の我が支那駐屯軍を包囲し、更に徐州・隴海線一帯には、中央軍三十五万が待機して北上の機会を窺つてゐた。他方、各界救国連合会など反日諸団体の抗日気運も日を逐うて激成されて行つた。これが蘆溝橋事件発生直前の北支の状況であつた。中国内戦を対日戦争に転化させた一大動因としての西安事件——それは東亜近代史に於て特筆大書の意義を有すべき事件であつたと云へる。

第十三章 蘆溝橋事件の真相

第二節 事件の発生と推移

謀し合はせた発砲の疑ひ

昭和十二年七月七日夜十時四十分頃、北平^{ペキン}西方十二キロの蘆溝橋北側の永定河左岸荒蕪地で演習を終了した支那駐屯軍歩兵第一連隊第三大隊第八中隊に対して突如数発の銃弾が河畔堤防の竜王廟付近よりなされたのが所謂蘆溝橋事件の発端である。

この時、清水節郎中隊長、野地第一小隊長、岩谷曹長、安保分隊長らは、堤防と蘆溝橋城壁の中国兵の間に、懐中電灯の点滅による信号が交はされてゐるのを目撃した（陸軍歩兵中尉野地伊七「事変発端の思出」昭和十三年七月「偕行社」特報、安保喜代治「蘆溝橋事件の回想」昭和六十二年五月「支駐歩一会々報」蘆溝橋事件五十周年特集号、支那駐屯歩兵第一連隊「蘆溝橋付近戦闘詳報第一号」など）。すると、再び今度は十数発の銃撃が我軍に向つて浴せられ、我軍は「伏せ」の姿勢でこれを避けた。

堤防と城壁の間に交信が行なわれていたこの事実は頗る重要であると思はれる。何故ならば、それは二つのことを示唆するからである。一つは、堤防上にゐた中国兵は城内の部隊とは全く無関係であつたのではなく、城内駐屯の少くともある分子と共謀関係にあり、密接に連絡し合つてゐたこと。二つには、日本軍に対する銃撃は偶発的なものではなく、予定され準備された意図的な犯行であつたことである。

銃撃を受けた我が中隊は直ちに集合したが、この時、兵一名が行方不明であることが分つた（二十分後にこの兵は

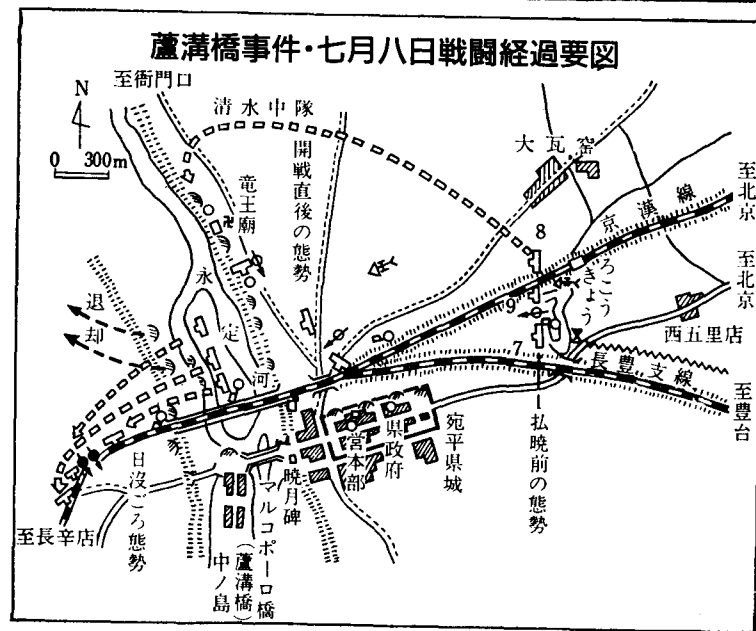
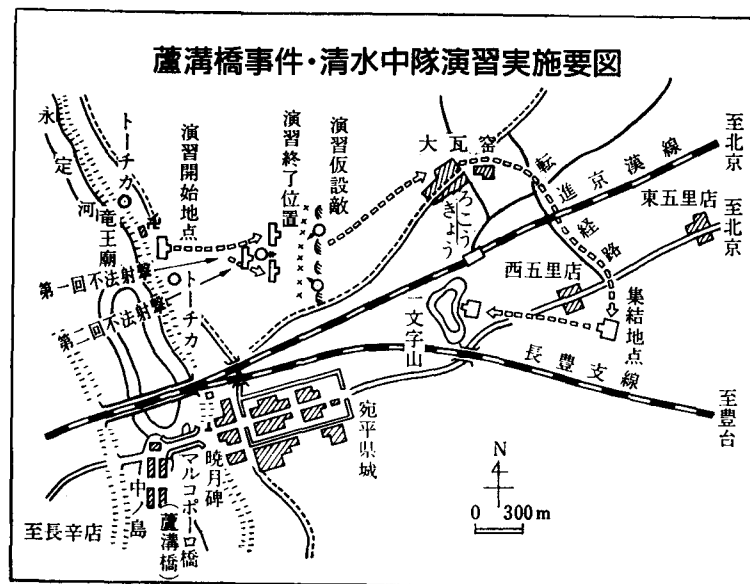
帰隊した。清水中隊長は岩谷曹長と喇叭兵^{らっぱへい}の二名を乗馬伝令として豊台^{ほうたい}に馳らせ、一木清直大隊長に事態を報告させた。更に大隊長らの電話報告を受けた北平の牟田口廉也第一連隊長は、夜明けを待つて蘆溝橋上の中国軍営長と交渉するやう命令した。また連隊長は北平特務機関に連絡、特務機関は不拡大方針に基づき、日支双方の代表から成る軍使を現地に派遣することを決めた。

軍使は、中国側は宛平県長・王冷齋、随員として冀察政務委員会の林耕宇、特務機関から桜井徳太郎・二十九軍顧問と寺平忠輔補佐官、それに北平憲兵分隊長・赤藤庄次少佐が同行し、牟田口連隊長が警備司令官として北平に留まるため、その代理人として森田徹中佐が参加することになった。開門交渉のため桜井顧問のみ直ちに現地に直行し、軍使一行は八日午前四時、北平の連隊本部を出発した。

この間、現地清水中隊は中国側に対して一発の応射もせず約二キロ東の西五里店に移動し、豊台を発した第三大隊に合流、同大隊は一文字山を占領した。その直後の三時二十五分、再び竜王廟方向より三発の不法射撃が行なはれた。一木大隊長より再度発砲の件につき電話報告を受けた連隊長は、「三時二十五分と言へば既に彼我の識別が明瞭」にできる時刻であり、日本軍と知りつつ二度まで不法射撃を加へるのは侮辱であるとして戦闘開始を許可する。この時、重大命令であるとして時刻の確認がなされた。四時二十分であつた。以て我軍の軍律の厳しさを知るべきであらう。西五里店から一文字山へ戻る途中、大隊長は北平より車で来た中国第二十九軍顧問・桜井徳太郎少佐と出會ひ、秦徳純（北平市長・第二十九軍副軍長）が桜井に「中国兵は蘆溝橋城の外には一兵も居ない。発砲したのは匪賊かも知れない。城外に居る者は自由に攻撃してよい」と語つたことを聞かされる。

我軍七時間の隠忍自重

このやうな状況下で一木大隊が竜王廟付近の中国兵に対して攻撃を開始せんとした時、先刻の軍使一行が一文字



山に到着、連隊長代理として同行していた森田徹中佐は歩兵砲隊長・久保田大尉に対し、弾薬の装填禁止を命じた。森田中佐は、軍使出發後に連隊長が一本大隊長に電話で与へた戦闘許可を知らず、連隊長代理として不拡大方針で支那側と交渉に当らんとしたのである。しかし久保田大尉は直属上官たる大隊長の命令に忠たらずと決意し、部下に装填を命じ、砲撃命令を下した。この時森田中佐は、正に火を噴かんとする歩兵砲の前に身を挺して発砲を阻止した。（支那駐屯歩兵第一連隊「蘆溝橋付近戦闘詳報第一号」、寺田淨「第一戦の見た蘆溝橋事件記」、日比野士郎「一軍人の生涯」）身を以て危局を救はんとしたのである。

因に森田中佐は昭和七年第一次上海事変の時の爆弾三勇士の指揮官であり、のち昭和十四年八月、ノモンハンンの戦闘で戦死した。その勇猛果敢で知られた森田中佐にしてこの通り。現地日本軍の不拡大への誠意はかくの如くであつた。

大隊長は、森田中佐の諒解を得るには時間がかかることを考へ、攻撃を中止して部隊に朝食を取らせた。この時、軍使一行は、蘆溝橋城内で金振中營長（大隊長に当る）と交渉に入つたところであつた。

然るに我軍の攻撃中止を怯懦と誤つた竜王廟の中国兵は、俄然、我軍に猛射を浴びせてきた。事ここに至つて我軍も遂に反撃の火蓋を切つた。時まさに七月八日午前五時三十分。最初の不法射撃を受けてから実に七時間、一発の応射もせず隠忍自重を堅持した我軍であつたが、攻撃に移るや忽ち竜王廟の敵を撃滅し、永定河右岸に進出した。この戦闘で敵兵の遺体を調査した結果、手帳が発見され、その中に直系上官名として、第二十九軍長・宋哲元、第三十七師長・馮治安、第一百十旅長・何基澧、第二百十九團長・吉星文、第三營長・金振中、第十一連長・耿錫訓の名が記されて居り、紛れもなく二十九軍正規兵であることが判明したのである。「城外に中国兵は一兵も居ない」といふ秦德純の断言（城内の交渉で金振中と同じことを確言した）は嘘だつたのだ。

以上は蘆溝橋事件勃発時の概況であるが、不法発砲者が日中いづれの側の仕業であるか自づから明らかであらう。我が部隊の七時間にわたる隠忍自重は我方に開戦意図が全くなかつたことを立証するものである。